

ウェールズ再発見

(その 8)

翻訳家、教育者、実業家、蒐集家シャーロット・ゲスト

Wales Rediscovered

-Part 8 -

Charlotte Guest: Translator, Educator, Businessperson, and Antique Collector

吉 賀 憲 夫

Yoshiga, Norio

Abstract This paper is a biographical study of Charlotte Guest who is mainly known as the translator of *Mabinogion*, a collection of Welsh medieval legends. Her translation of *Mabinogion* into English was so great that her achievements in other fields are sometimes overlooked. She was a farsighted educator at Dowlais school and made many educational contributions to Wales. After her husband's death she played an important role as the leader of Dowlais ironworks in the difficult days of the iron industry. After she remarried Charles Schreiber, they traveled extensively and collected old English china, fans and playing cards. Those collections are now housed at the British Museum and the Victoria and Albert Museum in London. If we only think of her as a translator, it can be said that we cannot evaluate her highly enough.

シャーロット・ゲスト(Charlotte Elizabeth Guest, 1812-1895)は、中世ウェールズの物語や伝説を今に伝える『マビノギオン』(*The Mabinogion*)の翻訳者として、文学史上にその名を残している。『マビノギオン』と言えばシャーロット・ゲストを連想するほど彼女は有名だが、しかし彼女はそれ以外にも多彩な顔をもっていた。ウェールズの製鉄王と結婚した彼女は、夫の製鉄所や鉱山で働く労働者およびその子弟の教育につくした。また夫の死後は経営者としてその才能を発揮し、労働争議が多発するなか、労働者の信頼を得、当時製鉄業界が置かれていた厳しい経済環境を乗り切った実業家でもあった。再婚後は夫とともに世界の各地を旅行して陶器やトランプ

や扇を蒐集し、それらに関する書物を著した。さらに彼女は弱者救済に尽力した慈善家としても知られている人物なのである。

生い立ち

シャーロットは1812年に第9代リンジー伯爵アルバート・バーティ(Albermarle Bertie, 1744-1818)と彼の2番目の妻シャーロット・スザンナ・エリザベスの間に生まれた。シャーロットが6歳のとき、元将軍でスタムフォード選出の国会議員であった74歳の父が死去した。その3年後、母は31歳の聖職者である従兄弟と再婚したが、これは母にもシャーロットにも、決して好ましいものではなかった。新しい父の性格には少し問題があ

った。彼は酒好きで、おまけに酒癖が悪く、怒りにまかせ、召使い全員を解雇したこともあった。また清教徒革命時の王党派の指揮官を出したリンジー伯爵家の家系と新しい夫の家系は、あまりにも身分が違いすぎた。これは、リンジー伯爵の血を引くシャーロットは王の舞踏会に招待されても、継父との間に生まれた異父妹は決して招待されないという形で現れた。妹らは単なる聖職者の娘であったからである。このような問題を抱えたためであろうか、リンジー伯爵夫人であったころの快活で浣刺とした母も、再婚後は病気がちになり、引きこもることが多くなった。そのため、シャーロットは必要に迫られ、母の代理として客をもてなし、他家を訪問するようになった。

シャーロットは幼いころから人一倍好奇心が強く、また勉強好きであった。しかし、継父は女性には学問はいらないという旧来の考えの持ち主であったので、シャーロットはそのような継父を好きになれるはずがなかった。また一方、自分の能力と才能を犠牲にし、2人の夫と子供、そして家庭に対し献身的な努力を払い、ついには消耗していった母親の生き方には、やりきれぬ感情を抱いていた。シャーロットは母とは違う生き方を求めた。

自宅のあるリンカーンシャーの社交界も、ロンドンやブライトンの社交界もあまり好きにはなれず、ダンスのレッスンにも身が入らなかった。しかしシャーロットが、ただひとつ、社会に対し目を向けたのは、政治の分野であった。彼女は新聞を通して当時の社会状況や政治に関する事柄を良く知っていた。最初、彼女は典型的な貴族の娘らしく、保守的なトーリーの立場をとっていた。しかし 1830 年にイングランド南部で起きたスウィング暴動と呼ばれる農民の脱穀機打ち壊し暴動に対しては農民に同情し、さらに選挙法改正問題ではトーリーの主張に大いなる反発を覚え、やがてホイッグ的な政治スタンスをとるようになり、これは終世変わる事がなかった。

シャーロットの知的探求心は、彼女の家庭教師がついていけなくなるほどであった。そこでシャーロットは独学でフランス語やイタリア語を学び、弟の家庭教師フレデリック・マーティンとともにギリシア語、ラテン語、ヘブライ語、ペルシャ語を学んだ。また考古学や歴史や文学に親しむようになった。やがて彼女は、このケンブリッジ大学出身の家庭教師マーティンに好意を寄せるようになる。しかし家族や親戚、とくに継父は彼との結婚を許さなかった。そればかりか、こともあろうに六七歳の男の3度目の妻となるように勧める始末であった。また

シャーロットは、彼女が「かわいそうな弟」と呼んだ第10代リンジー伯の結婚に絡む陰謀を未然に防ぐなど、家族問題に賢明に対処したが、最後には疲れ果て、家を離れてロンドンで暮らすことを決意した。1833年4月30日、彼女はついに家を出た。21歳の誕生日を迎える数週間前であった。

ロンドンに出て来たシャーロットは、5月18日にスカイズ夫人に招かれオペラに行くが、そこで後に首相となるディズレイリー(Benjamin Disraeli, 1804-81)を紹介された。二人の交際がはじまった。彼女はディズレイリーに大いに魅了され、結婚の瀬戸際まで漕ぎ着けたのだが、そこで交際は終わる。ディズレイリーが紹介者スカイズ夫人と情事を重ねていたのであった。

一方シャーロットは、ディズレイリーと会ってから2ヶ月後の7月17日、ロンドンのあるディナーパーティーで、未来の夫となるジョサイア・ジョン・ゲスト(Josiah John Guest, 1785-1852)を紹介された。彼は南ウエールズの製鉄業者で、選挙法改正後の初代マーサー・ティドヴィル選出国會議員としてそのとき、ロンドンに滞在していた。二人をひきあわせたのは、ゲストの共同経営者ウィングダム・ルイスの妻であった。世間は狭いというか、それとも当時のイギリスの社交界が狭かったのか、ウィングダム・ルイス夫人は夫の死後、シャーロットの交際相手であったディズレイリーと結婚することになる。さらにディズレイリー夫人となったこの女性は、後年、シャーロットの長男イヴォールに将来の妻コーネリア・チャーチルを紹介し、またディズレイリー自身もイヴォールを貴族に叙する推薦者となった。ゲスト家とディズレイリー夫妻は因縁浅からぬものがあつた。それはともあれ、二人は出会ってから2ヶ月も経たないうちに結婚した。48歳のゲストは再婚であり、シャーロットとは27歳の年齢差があつた。

製鉄の町マーサー・ティドヴィル

シャーロットの夫ジョサイア・ジョン・ゲストは南ウエールズのマーサー・ティドヴィルで製鉄業を営むゲスト家の3代目の当主であった。彼の祖父ジョン・ゲスト(John Guest, 1722-85)はもともとビール醸造業者であり、また石炭商であったが、1759年に故郷のイングランドのシュロブシャーから南ウエールズのマーサーに製鉄所を立ち上げるためにやって来た。苦勞の甲斐あって、1767年にはドウライスの小さな製鉄所の経営者となった。息子トマスは1785年に経営を引き継ぎ、その製鉄所を近代

化し、19世紀初頭にはゲスト家のドウライス製鉄所は、ホームフレイスのペナダレン製鉄所と、クロシェーのカヴァルスヴァ製鉄所に続く大製鉄所となった。3代目のジョサイア・ジョン・ゲストは、ドウライス製鉄所の基礎を築いた祖父が亡くなった9ヶ月後に生まれ、ブリッジノースとモンマスのグラマースクールで教育を受けた。ジェントリではなかったため大学教育を受けることはできなかったが、製鉄業や化学や工業の知識に通暁していた彼は、マーサーで第3位であったドウライス製鉄所を業界のトップ企業に成長させた。2代目の父が死んだ1807年の時点で、彼の企業所有権はわずか16分の1にすぎなかったが、1815年には16分の8を有し、1849年までには、彼はそのすべてを取得して、ただひとりのオーナーマネジャーとなった。

前述したように、ゲストの製鉄所はマーサーのドウライスにあった。祖父のジョンがやってきた当時、その地域にはマーサー・ティドヴィルと呼ばれる小村落があるだけで、周囲には広大な森林と、水力を供給するドウライス川があった。またその近くには石炭と鉄鉱石を産出する地域があり、製鉄業にはうってつけの場所であった。マーサーでの製鉄業が莫大な利益を生むことがわかると、イングランドから資本家が押し寄せ、マーサーはウェールズにおける製鉄業の中心地となった。

労働者は隣接するウェールズ郡部からやって来た。やがてマーサー・ティドヴィルの村はどンドンと膨張し、人口7000人以上が住む、汚く不衛生な人口過密の町となった。マーサーの人口は1861年には5万人に達した。その7年前の1854年に、ウェールズを徒歩旅行したジョージ・ポローがマーサーを訪れている。彼は不潔なぬかみを通り抜け、橋を渡り、町のなかに入った。その町の街路は汚く、複雑に入り組んでいた。彼は翌日カヴァルスヴァの製鉄所を見学した後でマーサーの町を見物し、次のように記している。

The town is large and populous. The inhabitants for the most part are Welsh, and Welsh is the language generally spoken, though all have some knowledge of English. The Houses are in General low and mean, and built of rough grey stone. Merthyr, however, can show several remarkable edifices though of a gloomy horrid Satanic character. There is the hall of the Iron, with its arches, from whence proceeds incessantly a thundering noise of hammers. Then there

is an edifice at the foot of a mountain, half-way up the side of which is a blasted forest and on the top an enormous crag. A truly wonderful edifice it is, such as Bos [sic] would have imagined had he wanted to paint the palace of Satan. There it stands: a house of reddish brick with a slate roof—four horrid black towers behind, two of them belching forth smoke and flame from their tops—holes like pigeon-holes here and there—two immense white chimneys standing by themselves. What edifice can that be of such strange mad details? I ought to have put that question to someone in Tydvil, but did not, thought I stood staring at the diabolical structure with my mouth open. It is of no use putting the question to myself here. ¹

ここにはロマンティックなウェールズはもはやない。ボローが呆然として立ちつくしたのも頷ける。ところで当時、マーサーにはカヴァルスヴァ製鉄所の所有者ウィリアム・クロシェー2世(William Crawshay II, 1788-1867)がいた。彼は、もしフランス革命時に生まれていれば、猟銃で逃げていく王の尻に弾丸を浴びせてやったのに、と言ったという言葉に表れているように、大変な急進主義者であった。1810年に企業を引き継ぐと、彼は会社の金3万ポンドを使い、中世趣味の城カヴァルスヴァ城を建てるなどの浪費をした人物でもある。シャーロットは彼の性格を”volatile”²と評したように、彼は決して紳士と呼べるような人間ではなかった。

そのウィリアム・クロシェー2世のカヴァルスヴァ製鉄所で、1831年に大幅な賃金カットが行われた。6月2日に選挙法改正問題で先鋭化していたカヴァルスヴァの労働者を中心に、何千人もの人々が抗議の大集会を開いた。仔牛の血で染めた赤旗を先頭にデモ行進が行われ、それが暴動に発展した。群衆は鎮圧に来た正規軍と正面衝突し、少なくとも24人以上の死者と70人以上の負傷者が出たが、軍隊を追い返すことに成功した。それから4日間、マーサーは300人から400人の武装した労働者に支配された。しかし新たに800人の兵士が投入され、このマーサーの暴動は鎮圧された。その後に処罰が続いた。28名が暴動の罪で裁判にかけられた。少数の者が投獄され、4名が流刑となった。そしてディック・ペンデリン(Dic Penderyn)ことリチャード・ルイス(Richard Lewis, 1807-31)ひとりだけが、見せしめのためにカーディフで処刑された。これがウェールズ労働史上有名なマ

一サー暴動の顛末である。

シャーロットがその鉄の町にやってきたのは、このマーサー暴動の 2 年後のことであった。マーサーはウェールズにおける製鉄業の一大中心地であり、また産業革命の拠点のひとつでもあった。しかしロンドンの上流階級から見ると、巨大な富を生み出すウェールズの製鉄業者といえども、成り上がり者で、いかがわしい人種にすぎなかった。またマーサーは先にも述べたように治安や政情の不安定な地域で、貴婦人が嫁ぎ、移り住む場所とは考えられなかった。したがってマーサーへと嫁いできたということは、彼女が階級の枠を超え、さらにウェールズという「異国」で新たな生活に入ったことを意味した。

1833 年、2 人はドウライス製鉄所のすぐ近くにあるゲスト家の邸宅ドウライス・ハウスで生活をはじめた。そこでの生活は多岐に渡り、彼女にとって充実したものであり、旧来の階級的枠組みのなかでは、決して味わえないものであった。シャーロットはジョンの秘書として働きながら家業である製鉄業について学んだ。また、当時の最新技術であった溶鉱炉への熱風送風に関するフランス語のパンフレットを英語に翻訳し、匿名で出版するなど、自分の才能を十分に発揮しながら、水を得た魚のように、生き生きと事に当たった。

彼女はまた夫の選挙運動にも携わった。ジョンの選挙区は山の尾根をまたいでマーサー・ティドヴィルとアバデアに広がっていたが、彼女はウェールズ語を学び、直接地元の有権者に会い、夫の政治的立場をウェールズ語で訴えた。また夫の代わりに有権者に説得の手紙を書いたりもした。これらの活動は大成功を収めた。

ゲスト家の一員としての仕事の他にも、シャーロットはウェールズ文化の保存のために尽力し、中世の吟唱詩人の大会を復活させた新しいウェールズの祭典としてのアイステズヴォッドを支援した。この祭典はウェールズ人のナショナリズムを鼓舞し、彼らに自らの言語や文化への誇りを持たせた。またいわゆるウェールズ民族衣装なるものを「創作」したということで有名なシャノーヴェル夫人ことオーガスタ・ホールと連携し、1833 年 11 月 22 日にアベゲヴェニー・ウェールズ学者協会(The Society of Welsh Scholars of Abergavenny)を設立した。この協会は一般の学校や日曜学校でのウェールズ語教育を促進し、ウェールズ人の子供には伝統的なウェールズ語の名前を付けること、また毎年開かれるアイステズヴォッドで、ウェールズ語の詩、散文、歌、ハーブ演奏の競技会を開くことを提唱した。

『マビノギオン』の翻訳

しかしなんとといっても、シャーロット・ゲストの最大の功績は、中世ウェールズに語り継がれた伝説や物語を集大成した散文物語集『マビノギオン』を英語に翻訳したことであろう。これによりシャーロット・ゲストは、ウェールズ史の片隅の一製鉄業者の妻から、イギリス文学史上、さらにはヨーロッパ文学史上における、偉大な翻訳者のひとりとなったのである。それほどまでに彼女の『マビノギオン』の翻訳は文学史上画期的な出来事であった。

シャーロットがウェールズ語を学びはじめたのは 1833 年 8 月 15 日にドウライス・ハウスに転居してからまもなくのことであった。8 月 21 日には教区司祭のエヴァン・ジェンキンズと会い、早くもその 2 日後には彼からウェールズ語のレッスンを受けている。9 月 27 日には聖書の「マタイ伝」の一部をウェールズ語から英語に翻訳しようとしたことからわかるように、彼女のウェールズ語学習は順調に進んだ。

一方、1836 年にはウェールズ語の古写本の出版を目的とするウェールズ写本協会が発足した。同協会はその初仕事として、ウェールズ語の原文にその英訳をつけた中世ウェールズ物語集を出版することを決定した。これが後世『マビノギオン』として知られるものとなる。この『マビノギオン』の原本『ヘルゲストの赤い本』(*Llyfr Coch Hergest*)はヘレフォードシャーのヘルゲスト家が所有していた古写本で、赤い革で装丁されていたのでこの名があるのだが、この写本は 1701 年にオックスフォード大学ジーザス・カレッジに寄贈された。³ ウェールズ写本協会にとって幸いなことに、ウェールズの古写本の蒐集で有名であったモンマスシャーのボサンケット(Bosanquet)家が『ヘルゲストの赤い本』をさらに筆写したものを所有していたことであった。1836 年 11 月 30 日、同協会は出版のため、その写本を借りる許可をボサンケット家から得ることに成功した。このようにして『マビノギオン』出版の条件は整ったのである。

『オックスフォード版ウェールズ文学事典』(*Oxford Companion to the Literature of Wales*)が「ウェールズ人がヨーロッパ文学になした偉大な貢献」と賞賛した通称『マビノギオン』と呼ばれるこの物語集は、長く口承で伝わってきた個々の物語が、おそらく 11 世紀末から 12 世紀の初期にかけて文字にされたものである。現存するこれらの物語の写本としては、『リゼルフの白い本』(*Llyfr Gwyn Rhydderch*)と『ヘルゲストの赤い本』の 2

つがあるが、前者は1300年から1325年頃の写本であり、後者は1400年前後のものである。全部で11あるそれぞれの物語の内容は多岐に渡り、ケルト人の神話や、アーサー王をめぐる最古の物語から、中世宮廷ロマンス風の物語までである。しかしこの物語群の中核をなすのは、それらのなかでもっとも古い「マビノギの四つの枝」(*Pedair Cainc y Mabinogi*)と呼ばれる4つの物語である。

「マビノギ」(*mabinogi*)とはウェールズ語で息子を意味する言葉「マブ」(*mab*)から派生したもので、もともと少年期とか青年という意味であった。それが次第に「英雄の少年期の物語」という意味になり、最後には単に「物語」を意味するようになった。「マビノギの四つの枝」では、ダヴェド国の伝説的英雄プリデリの生涯が、これら4つの物語を織りなす縦糸として語られる。物語の主題は、墮落と贖罪、忠誠、友情、裏切り、愛、結婚、近親相姦などであり、舞台はグウィネズやダヴェドというウェールズに割拠する国々から、ロンドン、アイルランド、コーンウォール、さらにはこの世ではないあの世とでも言うべき「異界」にまで広がりを見せている。

第1の枝の物語である『ダヴェドの大公プイス』(*Pwyll Pendefig Dyfed*)では、ダヴェドの大公プイスがこの世とは違う世界「異界」で1年暮らす。この世に戻ったプイス(*Pwyll*)はリアンノン(*Rhiannon*)と結婚し、プリデリ(*Pryderi*)が誕生する。プリデリは里子に出されるが、のちに父の王国を相続し、キグヴァ(*Cigva/Kicva*)と結婚する。

第2の枝『スィールの子ブランウェン』(*Branwen Ferch Lyr*)では、スィールの子ブランウェンとアイルランド王マソルッフ(*Matholwch*)の不幸な結婚がもたらしたウェールズとアイルランドの戦争が語られる。プリデリはほとんど登場しない。ただアイルランドに攻め込み、かろうじて生き残った七人のひとりとして名が挙がるのみである。その7人とブランウェンは、兄でブリテン島の王であるベンディゲイドブラン(*Bendigeid Vran*)の首を携え、ハルレフに7年、ペンブロークに80年間幸せに滞在し、その後ベンディゲイドブランの遺言通り、ロンドンにその首を埋葬する。

第3の枝『スィールの子マナウィダン』(*Manawydan ab Lyr*)では、プリデリの母リアンノン、そして彼の妻のキグヴァ、そしてブランウェンの兄弟のマナウィダンが、ダヴェドの領土を放浪する。プリデリは白い猪を追ってある城に入るが、魔法をかけられ、そこに幽閉されてしまう。この話を聞いたリアンノンもプリデリの後を追って

その城に入り捕らわれるが、その後2人は無事解放される。

第4の枝『マソヌウイの子マース』(*Math Fab Mathonwy*)では、彼はグウィネズのグウィディオ(*Gwydion*)に豊穡と不死を象徴する大切な豚を騙し取られる。そしてその豚の奪還をめぐる戦争が起き、プリデリはグウィディオとの一騎打ちで敗れ、丘に埋葬される。その後、魔法で花から作られた女性ブロダイウェズ(*Blodeuwedd*)の不義とその結末が語られ、「マビノギの四つの枝」は終わる。

シャーロットが翻訳し編纂した『マビノギオン』には、「マビノギの四つの枝」の後に『ヘルゲストの赤い本』にある7つの物語が続く。この七つの物語をシャーロットは二つに分類した。第1のグループはウェールズに伝わる四つの物語で、はじめの2つは、ウェールズの民衆から見たローマ占領期あるいはそれ以前のブリテン島のことを語った『マクセン・ウエルディグの夢』(*Breuddwyd Macsen*)と『スウィドとスウェヴェリス』(*Lludd a Llefelys*)である。『マクセン・ウエルディグの夢』のマクセンとはマグヌス・マクシムス(*Magnus Maximus, ?-388*)という実在のローマの軍人で、ブリタニアの司令官であった。史実では、彼は西暦382年、ローマの帝位を要求し、ブリトン人を率い大陸に転戦し、西部皇帝となるが、388年にイタリアのアクウィレイアで皇帝テオドシウスに破れた。しかし彼の伝説はウェールズでは族長マクセンとして長く人々の心に残った。その題名が語るように、この物語は彼の夢のなかに現れた乙女をめぐる話であるが、同時にそれはなぜウェールズ人がフランスのブリタニー(ブルターニュ)に住みはじめたかという説明にもなっている。

もうひとつの物語『スウィドとスウェヴェリス』は、ブリダイン島(ブリテン島)を襲った3つの災いをスウィドとスウェヴェリスの兄弟が根絶するという話で、妖精物語の要素に満ちあふれている。3番目の物語『キルッフとオルウェン』(*Culhwch ac Olwen*)は、ヨーロッパ文学における最古のアーサー王物語として有名である。そこに描かれているアーサー王は、ノルマン・フランスや大陸の文化によって洗練される以前の、まさにウェールズ人的な人物として描かれている。最初のグループ最後の物語『ロナブイの夢』(*Breuddwyd Ronabwy*)は、ロナブイという名の若者が眠りに落ち、アーサー王をはじめとするブリトン人の英雄たちの栄光の日々を夢に見るといふ物語である。

第 2 のグループは『ウリエンの息子オワインの物語、あるいは泉の貴婦人』(*Owain: Chwedl Iarlles Y Ffynnon*)、『エヴラウクの息子ペレドゥルの物語』(*Ystoria Peredur ab Efrwg*)、『エルビンの息子ゲライントの物語』(*Gereint ab Erbin*)から成る。これらはすべてアーサー王伝説に関するロマンスである。さらにこの後に、シャーロットは『ヘルゲストの赤い本』には収録されておらず『マビノギオン』系列の物語でもないが、ウェールズでは大変有名な物語『タリエシン』(*Taliesin*)を加えた。

シャーロットは自らの翻訳を出版するにあたり、書名を『マビノギオン』としたが、この「マビノギオン」(*mabinogion*)という命名に関しては、彼女のちょっとした誤解があったようである。彼女は書名とするために、「マビノギ」(*mabinogi*)に複数形語尾「オン」(*on*)を付けたが、実は「マビノギ」自体が複数形であった。しかしこの彼女の命名は定着し、今日ではこの中世ウェールズ散文物語集は『マビノギオン』として世に知られている。

『マビノギオン』の英訳へ試みは、決してシャーロットが最初ではなかった。彼女より以前に、ウェールズ語辞書編纂家であり、文法家であったウィリアム・オーエン・ピューが部分的な翻訳をカンブリアン・レジスター誌(*Cambrian Register*)やカンブリアン・クォーターリー誌(*Cambrian Quarterly*)に発表していた。翻訳にあたり、彼女はオーエン・ピューの編纂したウェールズ語辞書を使い、マビノギオン翻訳に取り組んだが、彼の翻訳は参考にせず、いちからはじめたのであった。

彼女は多くの人々に支援され、励まされ、翻訳を続けた。そのなかには英国国教会の聖職者トマス・プライス(*Thomas Price: 1787-1848*)がいた。彼は当時ではもっとも詳しいと言われる『ウェールズ史』(*Hanes Cymru, 1836-42*)を 1836 年から 42 年にかけて出版した歴史学者で、古物研究家でもあった。吟唱詩人名をカルンヒアナウック(*Carnhuanawc*)といい、ウェールズの言語や文化の擁護者であり、言語学者としても知られていた。また彼は聖書協会とも密接な関係を持っていた。その上彼は大変ハンサムで、寛大で、気高く、純真であり、誰からも愛される人物であった。そのようなわけで、1833 年にアベゲヴェニー・ウェールズ学者協会が設立されたとき、彼に敬意を表すため、会員全員が一致して彼の名を会員名簿の最初に掲げることに賛成したという。しかし不思議なことに、ジョージ・ボローは『ワイルド・ウェールズ』のなかで、そのような同時代のウェールズの著名人

である彼に言及しなかったばかりか、シャーロットの『マビノギオン』にすら言及していないのである。

『マビノギオン』を翻訳するにあたり最初に選ばれた話は、『ウリエンの息子オワインの物語、あるいは泉の貴婦人』であった。この物語はアーサー王物語のひとつとして良く知られており、他の言語でも数多くの翻訳があり、言語的にも「マビノギの四つの枝」よりも易しかった。というわけで、まず手はじめにこの物語が選ばれたのであった。

1838 年の元旦にシャーロットの翻訳作業がはじまった。前述したように、テキストとしては、当時における最古の写本『ヘルゲストの赤い本』を底本とするボサンケット家所蔵の写本が使用された。今日最古の写本として知られている『リゼルフの白い本』は当時まだ発見されていなかったからである。まず吟唱詩人名ヨワン・テギッドとして知られている北ウェールズのバラの聖職者ジョン・ジョーンズがこの写本の『泉の貴婦人』を読みやすく筆写し、それをシャーロットの許に送り、彼女がそれを英語に翻訳した。この翻訳は同年 2 月 6 日に終了し、翌日トマス・プライスが彼女を訪問して印刷と出版の手順について話があった。そのとき、完成した翻訳を二人でさらに推敲しているのだが、この手順がそれ以後の翻訳と出版に至るモデルケースとなった。

シャーロットが『マビノギオン』の翻訳を開始したのは 1838 年で、彼女が 26 歳のときであった。それから 11 年後の 1849 年にすべての翻訳が完成した。最初に取り組んだ『泉の貴婦人』の翻訳にシャーロットは約 1 ヶ月を費やしたが、1 月 18 日に次男となる 4 番目の子マーサーを出産している。それから 37 歳になり翻訳を完成するまでに第 5 子から最後の子供である第 10 子まで 6 人の子供を産んでいる。⁴ このようにこの 11 年間は、翻訳と出産で心身の安まる暇がなく、とくに妊娠にともなう体調不良や精神的不安定に悩まされ、ときには精神的鬱状態に襲われた。彼女は日記に、” Everything I do now seems wrong, I can please nobody and I have myself the gnawing thought that I can never be useful and that every pursuit I have most attended to is vain-my time has been thrown away and because I am a woman there is no profitable way of spending that which remains.”⁵ と絶望感を書き記している。しかし彼女はそれらを克服し、この偉大な仕事を成し遂げたのであった。

その『マビノギオン』はウェールズ語のテキストとそ

の英訳、そして挿絵が付けられ、1838年から1849年にかけて12の物語が順次出版され、さらに1849年にはすべてが3巻本として出版された。また1877年に出版された『マビノギオン』第二版は、ウェールズ語の本文を省いた英訳だけの翻訳本となったが、その第2版の序文で、詩人テニスの『国王の牧歌』中のゲライントとエニッドに関わる部分が、彼女の『マビノギオン』を下敷きにして書かれていることを彼女は世に知らしめたのであった。そのころ彼女はすでにとテニスは親しい友人関係にあり、このことをテニス本人から直接聞いたのであった。『国王の牧歌』はヴィクトリア朝を代表するアーサー王物語であり、詩人テニスを通じて、中世ウェールズ文学の魅力の一端が世に伝えられていったのである。

「ゲスト学校」の教育者

『マビノギオン』の翻訳を終えたシャーロットが次に取り組んだのが教育問題であった。彼女がドウライスをやって来たときには、もう既に通称「ゲスト学校」とよばれる学校があり、ゲスト家の製鉄所や鉱山で働く労働者の子弟がそこで学んでいた。彼女は「ゲスト学校」における教育水準向上のための改革に着手した。

当時、学校といえば、まず教育の2大勢力であった英国国教会により設立された国民協会（ナショナル・ソサエティ）の学校と、非国教徒の英国内外協会（ブリティッシュ・ソサエティ）により作られた学校があった。またその他には、デーム・スクールと呼ばれる私塾や、「ゲスト学校」に代表されるような企業が従業員の子弟を教育する目的で設立した企業内学校があった。

ウェールズにおける最初の企業内学校は、モンマスシャーの製鉄業者が一七八四年に開設したものだが、ドウライスのゲストの製鉄所では、1820年に学校が設立された。夫妻は教育に関心が深く、国内や海外の工場を見学に行くと、その地の学校や教育制度をつぶさに観察し、その長所を彼らの学校に反映させた。とくにプロイセンの進んだ教育制度は、その後のドウライスでの教育改革に多大の影響を与えることになった。1839年に2人は、当時大変進歩的だといわれたロバート・オーエン（Robert Owen, 1771-1858）のニュー・ラナークの学校を視察したが、2人ともその学校が特別革新的ではないという印象を受けたほど、ドウライスの学校は進んでいた。⁶

1844年にシャーロットは「ゲスト」学校のさらなる改革に着手した。当時ウェールズには師範学校がなかったので、彼女はロンドンの学校で教員となる教育を受けた

者をゲストの学校の教師として採用するという制度を作った。また著名な学者を呼び、授業を行ってもらうようにもした。大部屋での多人数教育は行なわず、当時のプロイセンの学校がそうであったように、個々の教育目的にかなった教室が作られた。また他の学校と異なり、プロイセンと同様に、生徒は14歳になるまで教育を受けることができるようになった。これらの改革の結果、ゲストの学校は19世紀の全イギリスにおける企業設立学校のなかでもっとも進歩的であるという評判を得るにいたった。

シャーロットはまた、教育の枠を広げた。1845年に幼児学校を作り、1848年には16歳以上の女子従業員のためにウェールズで初の夜間学校を設立した。ここではウェールズの郡部からやって来た字が読めない若い女性たちへの特別の配慮が払われた。また男子のための成人学校も作られた。シャーロット自身もときおりこれらの学校を廻り、自ら講義を行なった。しかし生徒は彼女の英語がよくわからなかった。だが彼女は英語のかわりに決してウェールズ語で生徒に話すことはしなかった。また彼女自身はウェールズ語や、ウェールズの歴史に興味をもっていたが、学校ではあえてそれらを教えなかった。なぜなら彼女は英語とイングランドにまつわる事柄の学習が、将来的には生徒にとって有利であり、また重要であると考えていたからである。

このようなシャーロットの教育方針の背景には、1847年に出されたウェールズの教育に関する政府調査報告書の影響があった。この報告書が作成されるにいたった理由は、当時ウェールズに頻発していた暴動に端を発していた。1839年11月4日、南ウェールズのニューポートでチャーティスト暴動が起き、ウエストゲイト・ホテルの前でチャーティストと軍隊が衝突した。軍隊は群衆に発砲し、チャーティスト側に20人以上の死者が出た。また、1839年から1843年にかけて南西ウェールズを中心に女装した40人から200人の集団が有料道路料金徴収所を打ち壊す暴動が起きた。政府はこのような暴動がウェールズに起きるのはウェールズにおける教育に問題があるとし、1846年に委員会を作り、ニューポート暴動や、リベカ暴動後のウェールズの教育状況の調査を命じた。

委員会の委員たちは有能ではあったが、非国教徒やウェールズにおける労働階級のことは何も知らなかった。この委員会によりまとめられた報告書が翌年の1847年に公表されたが、それはウェールズ人の間では「政府報告書の裏切り」（Brad y Llyfrau Gleision）と呼ばれた悪

名高いものであり、その結論は大変な物議を醸し出した。⁷ なぜならこの報告書は、ウェールズ人が英語を理解できないのは、ウェールズ人の無知に原因があるとし、ウェールズにおける諸悪の根元を、ウェールズ語への固執と、非国教徒の蔓延に求めたからであった。

国教会と非国教徒との問題は別とし、シャーロットはこの政府報告書に大いに触発され、ドウライスの学校の改革に乗り出した。ウェールズ語しか話さない息子や娘たちが、将来産業界や一般社会で不利益を被るかもしれないと案じるウェールズ人の親も決して少なくはなかった。民族のアイデンティティとしてのウェールズ語を守るか、またグローバル化のなかでの英語の重要性を認め、それを学習するか、という切実な問題がウェールズ人に突きつけられていたのであった。シャーロットの友人のシャノーヴェル夫人がウェールズ語とウェールズ文化に固執したのと対照的に、シャーロットは英語とイギリス文化を重視した。そこにはシャーロットの時代の先端を行く産業人としての見解と見識があったのである。

「ウェールズ語使用禁止」

ここで1847年の「政府報告書」以降の教育現場におけるウェールズ語の立場について述べておく。その報告書が偏見に満ちていたにもかかわらず、ウェールズ人の間で英語習得の必要性は大いに支持された。非国教徒の学校であるブリティッシュ・スクールでも英語が重視された。そのような傾向のなかで、ウェールズの学校からウェールズ語を「追放」する動きが生じた。それを象徴的に表しているのが「ウェールズ語使用禁止」(Welsh Not)と書かれた板であった。

この「ウェールズ語使用禁止」の板の話は、ウェールズの学校教育の不満を述べる際に必ず出てくる事例であり、教室でウェールズ語を使った生徒の首に罰として掛けられたとして、ウェールズ語弾圧の証人のように言われてきた。事実その板を首に掛けられた経験を持つ者の報告もある。しかし、「ウェールズ語使用禁止」と書かれたこの板は、実際には懲罰として使用された例は少なく、そもそも懲罰の道具として作られたものではなかった。むしろ、この板はひとつのシンボルであったというべきであり、新入生が入学するとき、学校に掲げられた英語習得への決意を表すスローガンであった色彩が強い。⁸ したがって、「ウェールズ語使用禁止」という札は、英語習得へのウェールズ社会の態度表明としての象徴的な意味をもつものであった。

英語教育をするにしても、それをどのように行なうかが問題となった。ウェールズ語を一切使わずに、すべての科目を外国語である英語で教える直接教授法(ダイレクト・メソッド)が英語学習に効果があるのか、それともウェールズ語を英語で行われる授業の補助言語として使用するのが良いのかという議論が生じた。流れは補助言語として使うという方向になった。⁹ 補助としての位置づけではあるにしても、ウェールズ語はともかく学校教育のなかに生き残ったのであった。

このような流れの背景には、1870年から1902年にかけてのウェールズ国民復興があった。その運動を担ったのは、イングランドで大学教育を受けウェールズに戻ってきた知識人たちであった。ウェールズに誕生した大学を中心に、学問の領域ではウェールズ語がその地位を確立しつつあった。またオックスフォード大学初代ウェールズ語教授でケルト学者として高名なサー・ジョン・リース(John Rhys, 1840-1915)は1885年に『ケルト学講義』(*Lectures on Celtic Philology*, 1885)を出版し、多大な影響をウェールズに及ぼした。このウェールズ国民復興運動が、ウェールズ語およびウェールズ文化の保存に力を貸したのであった。

この国民復興運動の高まりのなかで、ウェールズ語問題に関しては、1879年のアイステツズヴォッド・カーディフ大会において「単にウェールズの民族意識を強化するためだけでなく、英語を母国語とする学生がウェールズ語を学ぶのを助けるためにウェールズ語を維持することの正当性」という題のエッセイが賞を得た。1882年には『ウェールズ語という媒体を通した英語教育の必要性』(*The Necessity of Teaching English Through the Medium of Welsh*, 1882)という影響力のある本が出版された。カムロドリオンでは「ウェールズの小学校でウェールズ語を教える妥当性」という講演が1884年に行なわれた。また1885年にはウェールズ語を守ろうとする「ウェールズとモンマスシャーにおける教育手段としてのウェールズ語を活用する協会」(*The Society for the Utilisation of the Welsh Language as an Instrument of Education in Wales and Monmouthshire*)という団体が組織された。その団体のウェールズ語名は「ウェールズ言語協会」(*Cymdeithas yr Iaith Gymraeg*)といい、英語名よりもさらに積極的なウェールズ語擁護の姿勢を示している。¹⁰

ウェールズの英国国教会と地主層は英語習得の重要性を主張した。一方、非国教系宗派はこのような流れのなかで、ウェールズ語擁護の姿勢を明確に打ち出すこと

ができなかった。これらの2つのウェールズにおける学校教育に責任を持つ団体は、ウェールズ語を存続させるために徹底的に戦うという気配がまったくなかった。しかし識者の間ではウェールズ語に関して依然として激論が交わされていた。このような状況のなか、1887年に設置された通称クロス委員会と呼ばれる「イングランドとウェールズの教育に関する王立委員会」は、教育におけるウェールズ語の地位の拡大を勧告した。だがウェールズ語を学校のカリキュラムで特殊科目として認めるという好意的な勧告にもかかわらず、その実現に向けての歩みは鈍かった。しかし1891年に、より高度な教育基準に達している学校ではウェールズ語は選択科目となり、1892年には正式なカリキュラムが作られ、ウェールズ語文法、英文ウェールズ語訳およびウェールズ語英訳、そして書取りの授業が行われた。さらにその後は、ウェールズ詩やウェールズ語作文という科目が加わった。そして1893年、ついにウェールズ語は正式科目となり、全年に導入された。¹¹

実業家、蒐集家シャーロット

シャーロットに戻る。夫ジョンが1846年にドーセット州のウィンボーン近くのキャンフォードに11,000エーカー（約44.5平方キロメートル）の地所と屋敷を購入した。これにより、一製鉄業者に過ぎなかったゲスト家は地主となり、彼もイギリス社会のエスタブリッシュメントの一員となった。ジョン自身は一代限りの準男爵であったが、長男のイヴォールは1880年、その地所の名を冠したウィンボーン男爵となり、世襲貴族の仲間入りを果たした。またその子孫は子爵となるのである。この土地の購入はゲスト家にとって物入りではあったが、それ以上の「利益」をもたらしたのであった。

1852年、健康を害したジョンに死期が近づいていた。その時点でゲスト家は大問題を抱えていた。それは間近に迫ったドウライス借地権更新に関する問題であった。地主であるカーディフのビュート侯爵家が更新を認めるかどうかゲスト家の命運を握っていた。借地権更新問題を残したまま、1852年11月26日、ジョサイア・ジョン・ゲストは死去した。そのときシャーロットは40歳であった。夫は50万ポンドを残した。彼女は再婚するまでドウライスの不動産の受託者となった。製鉄所の権利は5人の息子が均等に相続した。1853年1月18日、ドウライスの借地権は更新され、52年間延長された。

夫の死後、彼女はドウライス製鉄所の経営にあたった。

当時は鉄の需要が減り、製鉄業にかつての最盛期の面影はなかった。1847年には172,747ポンドあったドウライスの利益も、1850年には4,000ポンドに激減し、その翌年の1851年には初めて損失3万ポンドを出した。¹²その後、1858年にはマーサーの4つの製鉄所のひとつであるペナダレン製鉄所が閉鎖された。このようにシャーロットがドウライスの経営を引き継いだときは、製鉄業にとって苦難のときであったが、しかし彼女には、夫がロンドンの議会に行き留守のときに製鉄所の経営にあたった経験があり、また知識もあった。また、なによりも彼女は有能であった。彼女はドウライス製鉄所を成功へと導き、実業家としても成功したのであった。

当時は急激なインフレで物価が高騰し、個々の企業の度重なる賃上げにもかかわらず、労働者の賃金はそれに追いつかなかった。この物価と賃金値上げのイタチごっこから脱するため、彼女は他の製鉄業者を説得し、統一賃金に同意させた。彼女はまた、賃金支給方法も改めた。労使の間の緊張もあった。彼女は労働者の基本的権利を認めた。製鉄所では月曜日からの溶鉱炉の操業にあわせるため、日曜の夜、溶鉱炉に点火をしなければならなかったが、彼女は日曜には労働者に働かなくてもよい権利を認め、月曜の朝に点火するようにした。また彼女は夜間に鉄のパドルを積み上げる作業に、若年女性を雇うことを禁止した。しかし彼女がドウライスの経営から去ると、またいつの間にかそれが復活された。

ジョンが死去して24日後、シャーロットの家にチャールズ・シュライバー(Charles Schreiber, 1822-1888)が長男イヴォールの家庭教師としてやって来た。彼女はイヴォールの大学入学に備えるための家庭教師を、また入学後はイヴォールのチューターとなるべきケンブリッジ大学出身の学者を捜していた。チャールズ・シュライバーはシャーロットよりも10歳年下で、ケンブリッジ大学トリニティー・カレッジのフェローであり、一時期は国会議員でもあった。

彼女は次第にチャールズに惹かれていくとともに、製鉄所経営に疲れ、また経営への情熱も失っていった。またキャンフォードの屋敷がまもなく長男の所有になるため、自分の住まいを探さなければならなかった。1854年12月、すなわち長男イヴォールがケンブリッジの2年生のとき、チャールズはイヴォールのチューターを辞めた。そして1855年4月10日、シャーロットはチャールズと再婚する。夫の死後3年目の再婚であった。彼女の子供らはチャールズ・シュライバーを継父とは認めなかった。

しかしシャーロットは子供らの気持ちが十分に理解できた。彼女自身、同様の経験を少女期に経験したからであった。彼女の母は夫の死後 3 年で再婚し、シャーロットはその継父には馴染めなかったからであった。

再婚を機に彼女は製鉄所の経営から身を引いた。ちょうどそのころゲスト家の富にも陰りが見えてきた。ドーセットの大邸宅を相続した長男のイヴォールは、その家を維持するために大金が必要であった。兄弟のなかには軍隊で借金を作った者もあり、彼女はその返済の肩代わりをしなければならなかった。またドウライス製鉄所は長男を喜んで迎えてはくれなかった。またその製鉄所は設備更新のため、過剰投資を行ない、資金繰りに苦しんでいた。

1856 年の春に、シャーロットとチャールズはロンドン郊外のローハンプトンに、16 エイカーの小牧場がついた家を年額 550 ポンドの賃料で借りた。近隣には、ヴィクトリア朝の女流写真家ジュリア・マーガレット・キャメロン (Julia Margaret Cameron, 1815-1879) の姉で、芸術家や作家などの面倒を見ていたプリンセプ夫人が住んでいた。このプリンセプ夫人の家で、シャーロットはホルマン・ハント (Holman Hunt, 1827-1910) やダンテ・ガブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882) らラファエル前派の画家たちや文学畑の人々と接しはじめた。1857 年 4 月に詩人テニスンと会ったのも、この夫人の家であった。

彼女とチャールズはヨーロッパや中東を旅し、陶器や磁器を蒐集し、やがて彼らはこの道の大家になった。1884 年、夫チャールズがポルトガルを旅行中に死去すると、彼女は蒐集した磁器をサウス・ケンジントン美術館 (現在のヴィクトリア・アンド・アルバート博物館) に寄贈することにした。それらの収集品のなかには、イングランドで最初に生産された磁器であるポー (Bow) やチェルシー (Chelsea) などの貴重なイングランド陶器が含まれていた。1885 年 11 月 19 日、チャールズとともに蒐集した一切の陶器コレクションが梱包され運び出された。それを涙で見送った彼女は、". . . but I am most grateful that I have considered it a fitting monument to my poor darling-I feel sure it is what he would have approved of." ¹³ と日記に記している。

その後も彼女は旅を続け、扇や古いランプを蒐集し続けた。1887 年には、彼女の蒐集した扇に関する書物を書き、その後も英国やヨーロッパの扇に関する本を出版した。1891 年にはそれらの扇を大英博物館に寄贈した。

また彼女は社会にも目を向けていた。露土戦争で難民となったトルコ人に援助の手を差し伸べるためのトルコ慈善基金の活動に尽力する一方、ロンドンを走る馬車の御者たちの休憩所を作った。年老いて視力が衰えたシャーロットは馬車を多く使うようになり、御者たちの労働環境の改善にと、彼らが休憩や食事を取ることのできる小さな建物を建てたのであった。

イングランドとウェールズにまたがる幅広い活躍もさることながら、異なる分野で輝かしい業績をあげ、人生の節目に全力で事に当たり、そのすべてにおいて非凡な才能を発揮し、かつ偉大な成果をあげたレイディー・シャーロット・ゲストは 1895 年 1 月 15 日、ドーセットのキャンフォードにある長男のイヴォール・ゲストの館で死亡した。享年 83 歳であった。タイムズ紙はシャーロットの追悼記事で、蒐集家、社会福祉家としての彼女の晩年の功績を讃えたが、今日彼女の最大の業績として知られている『マビノギオン』翻訳に関してはなにも言及しなかった。一方、ウェールズの新聞は、『マビノギオン』の翻訳

を含め、彼女のウェールズでの偉大な功績を詳細に書き留め、彼女への感謝と哀悼の意を表したのであった。

注

1. George Borrow, *Wild Wales: Its People, Language and Scenery* (Ruthin, Wales: John Jones, 1998) 505. 引用文中の "Bos" とは "Boz" の誤りで、チャールズ・ディケンズの小説『ボズのスケッチ』 (*Sketches by Boz*) のなかの人物ボスを指す。
2. Gwyn A. Williams, *The Merthyr Rising* (Cardiff: University of Wales Press, 1988) 37.
3. オックスフォード大学ジーザス・カレッジ所蔵の『ヘルゲストの赤い本』および関連記事が次のインターネットのサイトにある。(オックスフォード大学ホームページ) Early Manuscripts at Oxford University Digital facsimiles of complete manuscripts, scanned directly from the originals" <http://image.ox.ac.uk/show?collection=jesus&manuscriptms1112004> 年 3 月 14 日取得)
4. Revel and Angela V. John, *Lady Charlotte*, (London: Weidenfeld and Nicolson, 1989) 33. シャーロットはジョンとの結婚により、13 年間に男女 5 人ずつ 10 人の子

供を産んだ。当時の貴族の夫人は平均 8 人の子供を産んだというので、シャーロットの 10 人というのは当時としては必ずしも驚くほど多いというわけではない。

5. Revel Guest and Angela V. John 36.

6. Revel Guest and Angela V. John 66-67.

7. その報告書は大非難を浴びたが、しかし個々のウェールズの教育状態を示すデータとしては有益であった。例えばその報告書は、マーサーやドウライスにある 37 の学校のほとんどを批判したが、ゲストの学校だけは賞賛し

た。とくにその男子高学年用の教室はウェールズで最高と評した。(Revel Guest and Angela V. John 65.)

8. Robert Smith, *Schools, Politics and Society* (Cardiff: University of Wales Press, 1999) 182-183.

9. Robert Smith 185.

10. Robert Smith 184-185.

11. Robert Smith 204.

12. Revel Guest and Angela V. John 167.

13. Revel Guest and Angela V. John 228.

(受理 平成 16 年 3 月 19 日)